

平成二十一年（二〇〇九年）二月十六日 神人合一

神から人へ、人から神へ。

神の願いは人の靈性、御魂の向上、そのみなれば。

神の次元に人は近付き、神の視点でものを考え、

己を超えて 我^がを捨てて、高き天より 地上を見下ろし、全てを見通す、無心の境地。

なれど 遠くの外より眺め、我^{われ}関^{かん}せずの 虚^{きよ}無^むになし。

己の私心、私欲を入れず、各々置かれし境遇を、内より観^{おの}ずる 視座に立つ。

遠くにも近くにも感じ、近くにもあれども 惑^{まど}わされず。

心は近くに 寄り添^よえど、私情に流^{なが}る 弱^よさになし。

さにて本日、神と人の一体化、神人合一の意味を説かむ。

人は 神代^{かみよ}の 太古の昔、この世に姿を現^{あら}わす前の、宇宙の混沌^{こんとん}、その中にて、

星や天体、銀河系、太陽系の 創^{つく}られし後^{のち}、

宇宙の意思を表^{あら}わすために、最後に創^{つく}りし 命^{いのち}なり。

宇宙の進化は 地球を作り、自然を作り、命を作り、やがては地上は 樂園^{らくえん}の如^{ごと}く、命の栄える星となり。

なれどそこには、神の心を、神の慈愛^{じあい}を 讃^{たた}えるものなし。

ただに動物 植物は、己の命を 謳^{うた}歌^かせど、神の慈愛^{じあい}を、栄光^{えいこう}を、尊^{とうと}ぶ心は持たざるを。

さにて 神は人を生^なみ、神の祈^{いのち}りを知^しるように、神の願^{ねが}いに応^{こた}えるように、御魂^{みたま}を分かち 授^{たま}けたり。

ここに人は、神から分^{わか}かれて、神の願^{ねが}いをこの世に映^{うつ}し、

神のみ業^{わざ}を 祀^{まつ}り、言祝^{ことほ}ぎ、宇宙の神秘^{しんぴ}を 讃^{たた}え 尊^{とうと}ぶ、人の使命^{しめい}の 始^{はじ}まりなり。

宇宙に 人のなかりせば、唯ただに寂さびしき、侘わびしき 虚空こくう。

なれど 人の現われて、神の偉業を 祝いわうとき、

神の慈愛に 感謝きんかを捧たもげ、神の巧たくみを 畏かしこむとき、

神の光は さらに増して、宇宙に 命あまねは 遍あまねからむ。

なれば人は 人なれど、神の御魂の一部なり。

神の願ねがいの 成就じょうじゆのために、人は 神の御心を、神に代わりて 称たたえ奉まつれよ。

宇宙は栄えど そを尊とうとぶ 命いのちのなからば、虚むなしからむ。

自然の豊かさ 美しさ、命の息吹いぶき、躍動やくどうを 讚たたえる 命いのちが必要なり。

神は 自みずから御魂を分かち、願ねがいを込めて 人を創つくれり。

なれば 人は 神の心も、宇宙の仕組みも、自然のりの則のりも、

御魂の奥にて 觀得かんとくし、神の心と 一体なるもの。

ことばを賜たまはる その意味は 神の願ねがいを 祈りに表わし、人の世界に 伝つたえ継つぎぐため。

形を持たぬ 神の願ねがいは、言霊となりて 宇宙に響かむ。

神と人とは 本来 一体わに分かてるものに あらざれば。

人は己のありがたき、尊ととき使命を 忘わするなよ。

命の讃歌は こだまして、宇宙の鼓動こどうを 促うながさむ。

人も宇宙の一部なり。宇宙は外に あるものならず。己の内にも 広がれるもの。

なれば 己の内なる宇宙に 神の光を 慈愛を照らせよ。

ことばの光、言霊は、己の内の御魂の奥に、神の慈愛を 降そそり注がむ。

さにて 本日、神人合一の意味を教えり。よく読み、御魂に 光を与えよ。さにて。